

ここで過失の有無に言及する必要はないでしょう。  
消失してしまい、原状回復が不能であること（412  
の2参照）を指摘すれば足ります。

ar 03194

※注意  
添削を希望される方は、必ず会員IDをご記入ください

1	第1 設問1について
2	1 代金の返還について
3	(1) AのBに対する金借借(95条)及び詐欺(96条)による取消しが認められた
4	ことにより、返還義務が生じ(121条)、AとBは互いに原状回復義務を負うこととなる(121条の2第1項)が、Aは本件絵画を消失しており、そのこ
5	について過失がない。ではAの原状回復義務はどのようになるか。
6	(2) 原状回復は契約の清算の場面であるから、客観的価値の返還
7	がその債務の内容となる。したがって、目的物の返還が不可能にな
8	った買主も原状回復義務としての客観的な価値返還義務を負うと
9	解する。
10	本件において、目的物たる本件絵画は500万円程度の価値しか
11	ないことが判明したため、Aは原状回復義務として、500万円程度の価値
12	をBに返還する義務を負う。
13	Aの転化した原状回復義務について適切に論じられています。
14	(3) したがってAは500万円、Bは5000万円をそれぞれ相手方に返還する
15	義務を負う。このとき、相殺(505条1項)により処理されるだろう。
16	2 利息の返還について
17	(1) Aは善意の占有者だから、果実を取得し(189条1項)、Bは詐欺(96条)
18	が認められるから、悪意の占有者として果実を返還する義務を負う(190条
19	1項)ように思える。
20	(2) しかし、本問のように給付利得の場合は、原状回復は契約の清算
21	を意味するから、一方が返還義務を負い、他方が返還義務を負わ
22	ないのは不公平である。

遡及的に無効となり、121の2が適用されるということですね。  
原状回復義務の内容(絵画・代金)は指摘しておくといいです。

この点は同時履行の抗弁権が付着しているため505  
条1項但書を論じる余地もあります(解答例参照)。

適切な理由付けにより処理ができています。類推適用においては、趣旨が妥当することを指摘することは必須ですので今後も続けていきましょう！

1	(3) ではどうやって処理するかが問題となるが、545条2項及び同条3項を
2	それぞれ類推適用すべきである。なぜなら、 <u>原状回復の点において、</u>
3	<u>契約の巻き戻しという点で共通しますね！</u>
4	取消しも角除も同じであるからだ。
5	したがって、Aは <u>果実</u> を、Bは利息をそれぞれ相手方に返還しなければ
6	ならない。
7	本問における果実は何か、指摘すべきでしょう(絵画の使用利益というこ
8	とになるかと思います)。
9	第2 設問2について
10	丙に対する請求 → 一応、即時取得が成立しないことは指摘しておくとい良いでしょう。
11	(1) 甲は丙に対して損害賠償請求(191条)するところから考えられる。このとき、
12	丙は占有物を「 <u>滅失</u> 」したことが問題となる。この「滅失」は、物理的
13	滅失に限らず、第三者に譲渡した返還が不可能になった場合も含む
14	から、丙は「滅失」とすべきである。
15	(2) 次に、丙は善意の占有者だから、その損害の全部の賠償を負う義務
16	を負うところ、その範囲が問題となる。
17	これは原則として、売却代金相当額が損害賠償の範囲となる。もと
18	も時価を上回る場合は、 <u>受益者の受益によるものであるが、その超過</u>
19	部分については受益者は返還する必要はない。
20	本問において、車売価は70万円であるが、本件製品の時価は50万円
21	であるから、丙は50万円の限度で甲に返還する義務を負う。
22	(3) 丙に対して丙は乙に対して支払った50万円を控除した上で支払う
23	だろう。
24	しかし、 <del>不当利得</del> <u>Good!</u> 侵害利得の場合、仮に丙の下に本件製品1がある
25	物権的請求権によりその物を返還するところ、本問のように丙の下に物が

動産であること、  
丁についてあきら  
かに即時取得の検  
討を求めているこ  
とから、丙につい  
てもひとこと触れ  
ておくのが答案と  
してバランスが良  
いと思われます。

この原則は自明の  
ものとは言いがた  
いでしょうから、理  
由付けが欲しいと  
ころです。

文言に即して問題提起をするという意識を  
強く持つと引き締まった答案になります。

よく考えられています。

物権的請求の補完的なものであることを理解できており良いです。



1 ないとき、代価の控除を認めないのは不公平である。

2

3 したがって、代価の控除は認められない

4 (4) 以上のことから、甲は丙に対し50万円の損害賠償を請求することができるとする。

5 2 丁に対する請求は、**丁所有になったという処理はすべき**

6 甲は自己が所有する本件製品が丁により加工されたことにより損失を被った

7 として、丁に対して償金請求することができるとする(246条2項、248条、703条)。

8 ことに対し丁は即時取得(192条)により所有権を取得したため、「法律上の原因」があるとして主張し、甲の請求を拒むだろう。

9 丁は丙との取引行為により平穩かつ公然と占有を始めており、さらに、丙に

10 対する権限があるという事実を踏まえ、信ずるに足る過失があるから、この場合、

11 即時取得の主張は認められる。

12 したがって、丁の利得には法律上の原因があるから、甲の償金請求は認められ

13 ない。

14 本間の事情のもとでは、193条、**以上**

15 **これを前提とする194条の処理まで**

16 **言及しておくことが望ましいでしょう。**

17

18

19

20

21

22

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

民法 第 58 問採点基準

	配点	得点
第 1 設問 1 について	[20]	[18]
1 代金及び本件絵画の返還について		
(1) BはAに対し、錯誤（95）ないし詐欺（96）に基づく取消し（121）による原状回復義務（121 の 2 1）として、既に支払った代金 5000 万円の返還義務を負担することの指摘	1	1
(2) AはBに対し、同様の義務として本件絵画の引渡義務を負担することの指摘	1	1
(3) 一方の原状回復義務の履行不能と同義務の帰すう		
ア 問題の所在 互いに原状回復義務を負っている者のうち他方の原状回復義務が履行不能となった場合の擬律が問題となる旨の指摘	2	1
イ 判断枠組み 当事者間の公平を意識しながら、自説を論じていること	6	6
ウ あてはめ 相殺の可能性も含め、適切に自説にあてはめていること	2	2
2 利息及び使用利益の返還について		
(1) 原則論の指摘 Aは、本件絵画の使用利益の返還義務を負い、Bは、受け取った代金の利息の返還義務を負うのが原則であることの指摘	2	2
(2) 189 条、190 条の適用 善意のAには 189 条が適用され、使用利益の返還を免れる一方で、悪意のBには 190 条が適用され、利息の償還を免れないことになることの指摘	2	2

(3) 修正の要否 本件がいわゆる給付利得であることを踏まえ、修正の要否・内容・理論構成等、自説を論じていること ※ 修正を要しないという結論でも構わないが、そのような結論が妥当であることを論じている必要がある	4	3
第 2 設問 2 について	[30]	[21]
1 丙に対する請求について		
(1) 法的根拠の指摘 191 条を指摘し、その要件について、端的にあてはめていること	4	4
(2) 請求額 判例の趣旨や射程を踏まえ、自説を論じていること	8	5
(3) 代価の控除 乙に対して支払った 50 万円を控除すべきであるか否かについて、判例の趣旨を踏まえ、自説を論じていること	6	6
2 丁に対する請求について		
(1) 法的根拠の指摘 246 条 2 項、248 条、703 条を指摘し、その要件について端的にあてはめていること	4	2
(2) 即時取得の成否 192 条を指摘し、その要件について端的にあてはめていること	4	4
(3) 194 条の適否 194 条の適用可能性を指摘し、判例の趣旨を踏まえ、自説を論じていること	4	0
合計点	50	39

あらためて全体としては非常によく書けていました。引き続き頑張ってください！！

答案作成おつかれさまでした！大筋としては出題意図を的確に捉え、論じることができていた良い答案であったと思います。

（広い意味での）不当利得返還義務の額をどのように決めるべきかという設問 1 説問 2 に共通するテーマについて自説から適切に論じられている点は非常に印象が良いです。

採点基準との関係で点数がやや低くなってしまった理由としては、①原則論に対しての理由が不十分、②出題者が用意した周知的論点のための事情を拾い切れていない、という点にあるでしょう。

①について。まさに論点である例外については説得的に自説を論じられている一方、前提としての原則を当然のものとして書いてしまっています。丁寧な理由付けというところを再度意識していただければと思います。

②について。本問の盗品であるという事情、丙がプラスチック製品販売業を営むという事情は 193・194 を使うために用意されたものです。このような事情から出題者の意図をつかみとっていけるとさらに点数が伸びるでしょう。